

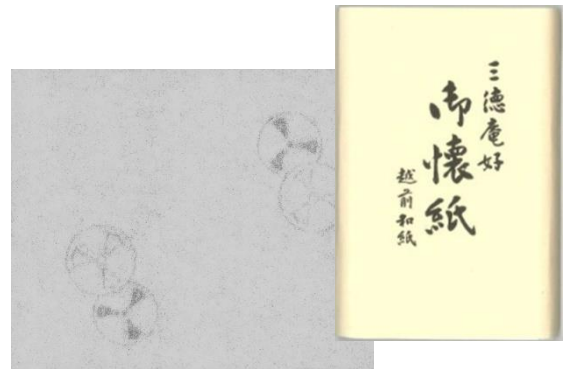
第 13 回：思いを大切にすること

教場長 田中仙融

「ブランド」という言葉を意識し始めたのは果たしていつだったのでしょうか。意識し始めた時は、伝統ある店の高級品が主役であったと思います。今や日本は「プライベートブランド」花盛りといっても大げさではないでしょう。マークや商標を上手に利用して、いろいろな商品が作られています。

ちょっと角度を変えてみると、私たちが稽古で使っている紋入りの帛紗や仙翁裂の古帛紗などは、まさに大日本茶道学会の「プライベートブランド」といえるでしょう。三徳庵の紋は、他流派の方から見ると、私たちの流儀を識別できるものとなっているはずです。

あまり、意識されていないと思いますが、身近なもので、私たちにしかない「プライベートブランド」の商品がありますよ。それは「懐紙」です。流儀多しと云えども、紋の透かしの入っている懐紙を使っているのは大日本茶道学会だけということ意識したことがありますか。ここには、仙翁前会長の想いと、それを作成してくれた方の紋に対しての想いが詰まっているのですね。



紋やマークと言っても、その形や色ばかりが興味の対象となり、その形がどのようにして作られてきて、また、多くの人によって育てられ、伝わっているのかということを考える機会がなくなってきています。実は、茶道で使う道具などは、実にいろいろな方の思いが詰まっているものなのです。伝来のある古いものであれば、今までの所有者の思いが、また、見立ての品であれば、見立てた方の美的感性が、そして、新しい物でも、作者の思いというものが詰まっていて、初めてわたしたちが手に取る形として目の前にあるのです。

そういった思いを大切に、ものを扱ってみませんか。そして点前として活かしてみましょ。きっと何かが変わるのではないのでしょうか。